

難聴者も健聴者も、みんなで活動できる場がある――

話を要約し、文字で伝える「要約筆記者」として、市内を中心に活動する森さん。手書きの筆記者として市や県の派遣依頼を受け、医療機関の受診時などに文字通訳をしています。一方で「島田市要約筆記サークルうさぎ」の設立時からのメンバーとしても、制度の周知や後進の育成に取り組んでいます。

【要約筆記との出会い】

県・市に登録した登録要約筆記者として17年間、活動を続けている森さん。その取り組みは、常に「うさぎ」と共にありました。

「初めは深く考えず、自分の成長になればと、養成講座を受講しました。そこで『難聴者と要約筆記者が一緒に歩む社会をつくりたい』と語る初代代表との出会いをきっかけに、共に『要約筆記サークルうさぎ』を2005年に設立しました」

【要約筆記を知ってほしい】

「聴覚障害者が会話する際の手段として、手話の認知度は高いものの、聴覚障害を持つ7割以上の人は手話を使えません。逆に要約筆記は、障害の有無に関わらず、文字さえ理解できれば

す。聞こえない・聞こえにくい人の立場を理解し、社会参加がしやすい世の中を作っていくたいと続けてきました。一時は活動の限界を感じ、閉会も考えましたが、一昨年に流れが変わりました。新たにメンバー



要約筆記者・要約筆記サークル「うさぎ」
もりまさこ
森雅子さん（本通六丁目）

ば、誰にでも伝えられます。一方で、聴覚障害者は見た目で障害があることが分かりにくく、周りに知られたくないと、隠してしまうことが多いんです。そのため、筆記者の認知が進んでいないのだと思います

3人が加入してくれたんです。昨年には、認定試験に合格。仲間が増えたことは、とてもうれしい出来事でした。現在サークルでは、老若男女、難聴者・健聴者を問わず、月2回の活動を楽しんでますよ」

【不得意があってもいい】

今年、活動18年目を迎える森さん。最近では、苦手なことにも仲間と取り組み、啓発を行っています。

「メンバーが増えたことで、新しい気付きがありました。啓発講座で使っているビデオを見た若い会員から『内容が古く、これでは見てもらえないのでは』と、代わりにフェイスブックを使った啓発手段の提案がありました。早速アカウントを作り、投稿はデジタルが得意なメンバーが中心となり、行っています。私はアナログ派だけれど、得意な人が不得意をカバーしてくれている。一人ではなく、みんなで取り組むことで、自身にとっての成長にもつながっています。要約筆記の認知が進み、サークルをのぞいてみようと思う人が増えたらいいですね。難聴でも大丈夫だよ、みんなと活動できる場があるよと、伝えていきたいです」

サークルや文字通訳など、人に寄り添い活動続ける森さん。これからも仲間と共に、心のよりどころとなる場を作っていきます。



サークル活動の様子
左のスクリーンは、森さんが要約筆記した内容

Shimadajin File #119

Story 島田人